

日墨交流 400 周年

ドン・ロドリゴと御宿と二人の日本人

高山 智博

村上直次郎と『ドン・ロドリゴ日本見聞録』

今年は日墨交流 400 周年に当たるとして、官民で様々な記念イベントが実施されている。その交流の始まりは、1609 年（慶長 14 年）9 月 30 日、スペイン植民地ヌエバ・エスパーニャ副王領（現在のメキシコ）の管轄下にあったフィリピンの総督ロドリゴ・デ・ビペロ（1564 年－1636 年）を乗せたガレオン船サン・フランシスコ号がヌエバ・エスパーニャに戻る途中、上総国岩和田（現在の千葉県夷隅郡御宿町）沖で遭難し、地元の海女や漁師の献身的な活躍によって、373 名中、317 名が救助されたという事件である。

『ドン・ロドリゴ日本見聞録・ビスカイノ金銀島探検報告』（村上直次郎譯註、昭和 4 年、駿南社）には、その時の住民の行動について、「彼等は大に憐み、婦人は非常に同情深きが故に涕泣せり。而して彼等自ら進んで其夫に對ひ、着物 quimones と稱へ綿を入れたる衣服を我等に貸與せんことを請ひたれば、彼等は予には之を與へ、諸人にも澤山貸與し、又其の用ふる所の食物を惜しむことなく供給せり」と記されている。

ビペロ一行の話はすぐさま近隣の大多喜にも伝わって、城主の本多忠朝が来訪し、見舞いとして金糸や絹糸を施した豪華な着物 4 着、牝牛 1 頭、鶏数羽、酒などを提供した。その上、城主は「皇帝（註：徳川家康）より處分方の訓令来るまで、予及び同所に在り

し、三百人に食料一切を支給することを命じたり。而して該村三十七日間之を實行せり」とある。

ビペロはこのような厚意を受けて大いに感激した。その後、彼は江戸で二代將軍徳川家忠と会い、さらに駿府城では徳川家康と会見した。そこで家康とビペロは日本・ヌエバ・エスパーニャ間の初の通商関係樹立を図った。その上、家康はウィリアム・アダムス（三浦按針）に命じて建造させたサン・ブエナVENTOURA号で、彼らをヌエバ・エスパーニャに帰国させた。これには京都の商人田中勝助らも同船した。

私は何十年か前に神田の古本屋で、ビペロが記録した『ドン・ロドリゴ日本見聞録』と、セバスチアン・ビスカイノがヌエバ・エスパーニャ副王に送った文書『金銀島探検報告』の合本を見つけて購入した。それはこの本が日墨交流史上最も貴重な文献であるだけでなく、その訳者がかつての上智大学学長・村上直次郎だったので、この大学に奉職する身として興味を持ったからである。

村上直次郎（1868 年－1966 年）は上智大学学長（1943 年－53 年）になる前、東京外国語学校（現在の東京外国語大学）イスパニヤ学科の主任教授、東京外国語学校校長なども歴任している。彼が文部省からスペイン、イギリスなどへの 3 年間にわたる留学を命ぜられたのは、1899 年のことであり、

1921 年には、論文「第十七世紀に於てメキシコと貿易を開く為日本のなした努力」によって文学博士の学位を受けていた。

ところで、『ドン・ロドリゴ日本見聞録』の原文を発見するに至った経過について、彼は次のように記している。「1850 年(発行の)ハクルイト・ソサイエティー Hakluyt Society 刊行のトマス・ランドール Thomas Rundall 編第十六世紀の日本帝国記録 Memorials of the Empire of Japan, in the 16th and 17th centuries に掲げたる物語梗概に依り始めて之を知り、原書を得て事の顛末を詳にせんと希望すること久しかりしが、明治三十四年(1901 年)英京留学中... ブリチシ・ミュージアム British Museum (大英博物館) に於て... ドン・ロドリゴ原書の寫本を発見せり。」

満足な辞書もなかったあの時代、17 世紀にスペイン語で書かれた手書きの古文書を判読し、翻訳することはきわめて大変な作業であったと感心せざるを得ない。

金井英一郎と『ドン・ロドリゴ物語』

1928 年(昭和 3 年)10 月 1 日、高さ 17 メートルのオベリスク型の「メキシコ塔」(正式名称「日西墨三国交通発祥記念碑」)が御宿の海を見渡せる丘の上に建立された。この碑が建てられるきっかけとなったのが、1924 年、上野村(現在の勝浦市)出身の報知新聞記者藤平権一郎が浪花村長浅野重雄に対して、「この岩和田の地は貴重な史跡の土地故、記念の碑を建てて後世に伝えるべきである」と進言したことによる。村長は 2 年にわたって努力したが、建設費用の点で難航し、最後に思いあまって、郷土の代議士であると共に、産業界でも大活躍していた森轟昶(後の昭和電工の創始者)に相談したところ、彼が金集めを引き受けてくれることとなり、記念

碑建設はたちまち具体化した。

その日、「内外の名士が溢れ、海には帝国海軍駆逐艦二隻が祝砲を放ち、空に帝国陸軍の飛行機が旋回し、盛大な(記念碑の)除幕式が行われた」(金井英一郎『ドン・ロドリゴ物語』新人物往来社、1984 年)。その除幕のロープを引いたのが森轟昶の娘の睦子(当時 11 歳、後の総理大臣三木武夫夫人)であった。この華やかな国際的祝典を、岩和田尋常小学校 1 年生だった金井英一郎は最前列で見ていた。この時の体験は、メキシコやスペインといった海外への憧れとなって、その後も彼の頭から離れることがなかったのではなかろうか。

金井英一郎(1922 年 - 2004 年)は御宿生まれ。少年時代はスキーと登山に熱中し、千葉県最初のスキーマー、それに谷川岳の 2 つの初登攀記録を持つクライマーになっている。戦時中は、陸軍軍人としてフィリピンに派遣され、「砲煙弾雨の戦場で、蜘蛛の糸を辿るような危うさで、辛くも命を繋いだ」(『白骨山河』文芸社、2002 年)のである。

復員後は、地元で父の事業のイセエビ飼育業に専念して、それを大成功させた。また“メキシコホテル”というコロニアル風リゾートホテルの社長でもあった。彼がはじめてメキシコへ行ったのは 1968 年のことである。妻のおじに当たる日本体育協会会長で、メキシコオリンピック日本代表選手団副団長青木半治と一緒にだったが、その際に、メキシコ各地を巡っている。

私が金井を知ったのは、1975 年に発足したコノスカ・メヒコ(メキシコを知る会)の講演会においてであった。これは数多くのメキシコ好きが集まった組織で、私はこの会の顧問をしていた。彼はコノスカ・メヒコ主催の講演会によく顔を出していたのである。

1978 年(昭和 53 年)5 月、金井の案内で、

私はコノスカ・メヒコの仲間と一緒に御宿を見物した。その同じ年の11月1日、メキシコのホセ・ロペス・ポルティージョ大統領が御宿を訪問した。記念碑建立50周年を記念してメキシコ政府の協力でメキシコ記念公園の拡張修復工事が行われたが、大統領はその除幕式のためにやって来られたのである。

エスコート役は三木睦子、セレモニーの演出者は大統領歓迎委員長の金井であった。ヘリコプターが到着すると、大統領にハッピーを着せてみこしに乗せた。大統領はみこしの上から熱狂する観衆に向かって、日の丸が付いた扇子を振って応えた。この前代未聞の歓迎ぶり、御宿は一躍全国的に話題的となった。

お祭り好きなメキシコ人を歓迎するには大統領をみこしに乗せるのが一番だと金井は考えた。それに友情には人種も国境もないと、老いも若きも一丸となって大統領を歓迎した。メキシコ塔での除幕式では、大統領と三木睦子がテープカットをした。それからメキシコホテルで歓迎レセプションが行われた。大統領はそこに集まった人々に対して、「御宿のエルマーノス（兄弟たち）」と呼びかけ、昔も今も変わらない心温まる行為に対して感謝したのである。この時の感激ぶりを金井は次のように記している。

「不安にさいなまれながらの準備作業4ヶ月、その日が近づくと悪天候がつづき、その前夜も雨が降った。しかし、その朝は青空となった。ロペス晴れだ。セレモニーはなんにもかも最高の出来。そのメヒコ・フィーバーの中を取材に駆けまわる報道陣。そして“御宿”の名は全国にとどろいた。ちっぽけなくせに一生懸命で、とてつもない大きなものにむしろぶりついていく“御宿”。天がこの“御宿”に味方してくれたのだ」（『ロペス・メキシコ大統領来町記念誌』1979年）。その日は金

井にとって、まさに一世一代の大舞台だったといえよう。

これ以後の金井の生活は、相変わらずスキー三昧だったが、戦記ものやスキー関連の本など、何冊か執筆している。その中にビベロに関する著作がある。彼は「ロドリゴの物語は、私が書かなければ」と決めて、そのために精力的に海外調査（メキシコ、スペイン、ポルトガル、イタリア、フィリピン）を実行した。その成果が力作『ドン・ロドリゴ物語』である。ビベロやその時代について、実によく調べているが、御宿の若い女性との恋愛など、想像力たくましくして書いた部分もある。このことに関して金井自身、「私の織ったロドリゴは少しロマンチストに過ぎたでしょうか」と言っている。確かにそうかもしれない。しかしビベロと御宿の村民との親密な関係について、精魂込めて書くと、自然にこうなるのではと、私は妙に納得したものである。

ともかく、村上直次郎と金井英一郎を突き動かせたのも、400年前に御宿の人々が示した、人間性あふれた行為を忘れさせたくないと思ったからに違いない。

ビベロ一行が救出された事件は、日墨交流の原点として、これからも記憶されて行くだろう。

このことは今年の9月26日、御宿における記念式典で歌われる合唱曲にも表現されている。「語ろう 忘れずに 伝えよう 今こそ あの日の奇跡を 語りつづけたい 村をあげての愛と勇気 岩和田の人々の 広い心とやさしさを 忘れずに語りつづけたい」（金沢智恵子作詞、黒澤吉徳作曲「あの日を忘れない」）。

（たかやま・ともひろ 日墨交流会会長）